

(33)

氏名(生年月日)	太田岳洋
本籍	
学位の種類	博士(医学)
学位授与の番号	乙第1560号
学位授与の日付	平成7年7月21日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当(博士の学位論文提出者)
学位論文題目	十二指腸乳頭部癌のDNA量分析の検討—組織学的諸因子、深達度、予後との関連について—
論文審査委員	(主査) 教授 高崎 健 (副査) 教授 小林 楨雄, 今井 康晴

主論文の要旨

[目的]

十二指腸乳頭部癌の予後規定因子としては、組織学的には胼浸潤とリンパ節転移の因子が重要視されている。さらに近年、種々の悪性腫瘍に対してDNA量分析が悪性度の指標になるといわれている。そこで今回、乳頭部癌におけるDNA量分析をおこない、DNA ploidy patternと組織学的諸因子、深達度、予後との関係からその意義を検討した。

[対象および方法]

乳頭部癌118例中、組織学的に治癒切除が施行され、なおかつ標本の組織学的検討が可能であった72例を対象とした。Hedleyらの方法に準じ、flow cytometryを用いてヒストグラムを作成してploidy patternを判定、ploidy patternと組織学的諸因子、深達度、予後との関係を検討した。その際、深達度を癌浸潤がOddi筋内にとどまる群(A群)、Oddi筋を越えるが胼実質に達しない群(B群)、胼実質に浸潤する群(C群)の3群に分類した。

[成績]

対象72例のploidy patternはdiploid 49例(68.1%)、aneuploid 23例(31.9%)であった。ploidy patternと、組織学的因子として取り上げた組織型、リンパ節転移、リンパ管浸潤、静脈浸潤、浸潤増殖様式との間には、静脈浸潤陽性だけがaneuploidに多かつ

た他は有意な差はなかった。深達度群別にaneuploidの割合をみると、A群ではaneuploidはなく(0/10)、B群では27%(10/37)、C群では50%(13/26)と、深達度が、深くなるにつれaneuploidは有意($p < 0.05$)に増加していた。ploidy pattern別の生存率を比較するとaneuploidは5生率35.9%と、diploidの72.1%に比べ有意($p < 0.01$)に予後不良であった。深達度群別にみるとB群ではaneuploidは5生率56.8%とdiploidの86.6%に対し有意($p < 0.01$)に予後不良であったが、C群ではaneuploid 21.6%、diploid 24.3%で有意差はなかった。

[考察]

aneuploidとdiploidの間に組織学的諸因子に関して殆ど差はないにもかかわらず、B群においてaneuploidはdiploidに比べ有意に予後不良であったことから、ploidy patternが腫瘍細胞そのものの悪性度を示す指標であり、重要な予後規定因子となりうると考えられた。しかし、C群ではploidy patternに関わらず予後不良で胼実質浸潤の予後に与える影響の大きさが確認された。

[結論]

胼浸潤のない乳頭部癌においては、ploidy patternの差は重要な予後規定因子となりうる可能性が示唆された。

論文審査の要旨

十二指腸乳頭部癌72例のDNA量を測定し、悪性度の指標としてのploidy patternの意義が検討された。従来の組織学的因子とploidy patternとの関係では、aneuploidに静脈浸潤陽性が多かった他は有意な差はなかった。aneuploidは深達度が深くなるにつれ有意に増加していた。術後の予後はaneuploidは有意に予後不良であった。乳頭部癌においてploidy patternは腫瘍細胞そのものの悪性度を示す指標であり、とくに腓実質浸潤のない症例では重要な予後規定因子となり得ると考えられた。

癌の悪性度について組織学的検討のみでは把握が難しい現実であるので、このような観点での検討が行われてきている。この論文はこのような観点で特に乳頭部癌についての検討が行われた。一応の結論は得られたが今後の更なる問題点も明らかとなった。

主論文公表誌

十二指腸乳頭部癌のDNA量分析の検討—組織学的諸因子、深達度、予後との関連について—

胆道 第8巻 第5号 411-417頁(平成6年12月24日発行) 太田岳洋

副論文公表誌

- 1) 肝内結石症に合併した肝膿瘍が胃壁に穿通し胃粘膜下膿瘍を形成した1例. 東女医大誌 61(9) : 919-923 (1991) 太田岳洋, 中村光司, 吉川達也, 新井田達夫, 吾妻 司, 竹田秀一, 平野 宏, 田中 譲, 戸田博之, 羽生富士夫, 村田洋子, 鈴木 茂
- 2) 胆嚢癌の神経浸潤とリンパ節転移様式からみた根治手術の条件. 胆と膵 12(2) : 177-183 (1991) 吉川達也, 羽生富士夫, 中村光司, 新井田達雄, 吾

妻 司, 平野 宏, 竹田秀一, 田中 譲, 太田岳洋, 戸田博之

- 3) 肝内結石症と胆管癌. 胆と膵 12(4) : 405-416(1991)羽生富士夫, 中村光司, 竹田秀一, 吉川達也, 新井田達雄, 吾妻 司, 平野 宏, 田中 譲, 太田岳洋, 戸田博之
- 4) 漿膜露出および他臓器浸潤胆嚢癌の進展様式と根治術. 胆と膵 13(2) : 163-172 (1992) 吉川達也, 羽生富士夫, 中村光司, 新井田達雄, 吾妻 司, 太田岳洋, 戸田博之
- 5) 両葉型肝内結石癌の外科治療. 胆と膵 13(9) : 1001-1008(1992)中村光司, 羽生富士夫, 吾妻 司, 太田岳洋, 吉川達也, 新井田達雄, 戸田博之, 吉田基巳, 武藤博昭, 森山 宣